

動物剥製によるジオラマの展示構成に関する研究

大阪芸術大学 教養課程 教授 若生謙二

はじめに

筆者は令和7年10月1日に大阪芸術大学に開設された、大阪芸術大学動物ジオラマ館芸大 Zoo の設計に携わってきた。芸大動物ジオラマ館では、ジオラマの背景に絵画を用いるのではなく、生息地の写真を用いることで計画・設計を進めてきた。生息環境としてのジオラマ展示を行う際には、背景と手前の動物剥製の一体化表現を試みるのが重要であり、そこにはなお大きな課題が残されている。本研究では、こうした背景と手前の剥製の一体化を実現する表現手法に焦点をあてて、ジオラマ展示の制作手法についての研究を行う。

1. 研究の背景

今日、各地の自然史博物館で見られる、野生動物の剥製を森林などの生息環境と共に展示するジオラマ展示は、ニューヨークのアメリカ自然史博物館に1932年に開設されたゴリラの展示から始められた、アフリカの展示、北米の展示などの体系的なジオラマ展示の影響をうけてつくられてきた。同館の展示は、剥製動物の精巧さと奥に広がる背景画の写実性から迫真的な展示となっており、その後、全米、欧州、日本などの世界のさまざまな展示に影響を及ぼしてきた。同館のジオラマ展示では、生息環境を表現するために、背景画を透視画法で表現することにより、奥行き感を表現している。

アメリカ自然史博物館がジオラマの背景を透視画法で生息地の風景を描いているのに対し、大阪芸術大学動物ジオラマ館では、生息地の写真を撮影して用いている。

2. 方法

本研究では、自然史博物館のジオラマ展示について、背景と手前の動物剥製についての一体化表現の方法について、事例を収集した上で、一体化表現の手法についての可能性を検討し、具体的なあり方と創出する方策について考察する。事例調査では、背景の表現と処理方法、背景と動物剥製の接合面の処理方法、動物剥製を配置している地面と植物や岩面の処理、擬岩、擬木の処理方法などについての調査を行う。博物館展示だけではなく、動物園展示においても屋内展示の背景面に絵ではなく、写真を用いている事例もあるので、それらについても調査の対象とした。

3. 調査結果

1) アメリカ自然史博物館のジオラマ展示

コンケイブ（凹状）地形型

同館のジオラマ展示には、背景処理について二つのタイプがある。一つは山岳地や丘陵地を背景とするコンケイブ（凹状）地形型である。この型では、観客とガラスで隔てられた展示側は、観客のレベルよりも80cm程高い位置に剥製が展示される地盤のエリアがある。その2m程奥は、崖等に設定して、落とし込むようにしてコンケイブ地形をつくり、観客の視線を一旦切り、その奥の壁面に数キロ先に広がる風景を透視画法で描いている。こうして剥製の配された手前の風景とつないでおり、延々と続く奥の風景とつなぐことに成功している。この事例では、背景と剥製の間にコンケイブ地形を取り入れることで、両者の一体感の創出を行っている。ヨセミテ渓谷やイエローストーン国立公園、アンデス山脈などでの事例に秀作がみられる。

2) アメリカ自然史博物館のジオラマ展示 平地と一体型

同館でのもう一つのタイプは、草原での表現を延長するタイプであり、アフリカサバンナやアメリカ中部のプレーリーなどの大草原地帯の表現に用いられている。観客の位置より50cm程高い位置を草原の地盤高として、ガラス越しに動物の剥製を配する。地面には多数のイネ科草本類を配して、景をつくり、背景の壁面画との境界は、この擬草の草本類と奥の壁面画に描かれた草本で一体化の処理を行っている。

3) 群馬県立自然博物館のジオラマ展示

群馬県の森林に生息する動物の剥製をジオラマとして展示しており、キツネ、タヌキ、ホンドリカ、キジなどがみられる。観客との境界にガラスはなく、森の中に観客が入り込む小径を通りながら、展示を体験する構造となっている。森林は山地のような起伏をつくり、そこにコナラやクヌギ等の多くの樹木の擬木を配し、地表には低木とシダ類、草本等の擬草を配している。また、奥の壁面には森林を描いており、手前の擬草との一体化を創出している。

また、湿原のジオラマでは、擬草でミズバショウの群落を再現し、湿原の奥には尾瀬沼の背景を描き、遠近法で一体感を表現している。

4. まとめ

ジオラマ展示の背景と前面の剥製動物との一体感には、凹型地形の活用や、擬草、擬木を活用して背景との連続性を表現して一体感を創出する必要がある。